論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　倉田　明子

倉田明子氏の学位請求論文「19 世紀南中国におけるプロテスタント布教の発展と「開港場知識人」の誕生――洪仁玕と『資政新篇』の位置づけをめぐって」は，1840 年代から 1860 年代にかけて香港と上海で展開したキリスト教（プロテスタント）布教の様態に着目し，この時期，南中国におけるキリスト教布教の結果形成された新しいタイプの知識人の活動や思想を，洪仁玕という人物を軸にして描き出そうと試みたものである。

論文は，序章と本論 7 章，および終章からなり，巻末に別表 2 種（6頁），参考史料・参考文献一覧（11 頁），および人物関係図（1 枚）を収める。本文はA4版で全 188 頁あり，字数は約 27 万字（原稿用紙 400 字詰めに換算して約 680 枚）の分量になる。

まず，本論文の内容を紹介する。

序章で筆者は「開港場知識人」という独自の概念と視角を提示し，これに関連する先行研究を整理した上で，四つの課題を設定する。すなわち，（1）初期中国プロテスタント史の再構成，（2）洪仁玕像の再構成，（3）「開港場知識人」の台頭・誕生の跡づけ，（4）中国近代化プロセスにおける洪仁玕『資政新篇』の位置づけ，の四点を本論文が考察すべき課題とし，本論の構成を提示する。

第1章「南京条約以前の南中国におけるプロテスタント布教の展開」では，1807 年のロバート・モリソンの広州到着から 1842 年の南京条約の締結に至るまで，ロンドン伝道会などキリスト宣教師によるマカオや広州での布教活動をたどりつつ，草創期のプロテスタント布教史を概観する。

続く第2章「プロテスタント布教の拡大と太平天国運動」では，1842 年の開港以降，おもに香港と上海で本格化したプロテスタントの布教活動を整理し，これに刺激を受けて南中国に広がった太平天国運動にも眼を向け，宣教師側の史料を使いつつ，外国人と中国人を含めたキリスト教徒と太平天国の勢力拡張には錯綜する関わりがあったことを指摘する。

本論文の主人公とも言うべき洪仁玕を扱うのが，第3章「洪仁玕とキリスト教」である。ここでは，洪仁玕がキリスト教を受容するに至った経緯やロンドン伝道会助手としての初期活動の実態が，バーゼル伝道会などの未公刊史料を駆使しつつ詳細に語られる。

また，李正高や王韜など，本論文で「開港場知識人」に分類される人士と洪仁玕の接触・交友関係も，本章で明らかにされる。

第4章「香港・上海における開港場知識人の誕生」は，ロンドン伝道会がそれぞれ香港，上海に設けた英華書院，墨海書館という印刷所兼出版社に着目し，ここで出版された書籍や刊行物が，洪仁玕ら「開港場知識人」にとって西洋に関する知識を得る上でもっとも重要な情報源になっていたことを指摘する。なかでも，筆者は英華書院や墨海書館を運営した西洋人宣教師の活動のみならず，宣教師の助手や翻訳協力者・論文執筆者として貢献した中国人信者の存在に注目し，聖書や宗教書のみならず，科学書の翻訳や出版においてかれらの果たした役割を重視する。

つづく第5章「『資政新篇』における西洋文明とキリスト教の影響」では，洪仁玕の主著とされる『資政新篇』に関する詳細なテキスト分析が展開される。筆者は，宣教師によって紹介された英文の資料なども参照しつつ，従来知られることのなかった『資政新篇』の著述と刊行の過程を逐一跡づけ，その思想内容についても新たな知見を加えている。洪仁玕が『資政新篇』の執筆に当たり参照・引用した地理書とのテキスト対照一覧は，文中の表 1-3 や巻末の別表 2 に収められる。

第6章「洪仁玕と太平天国」は，1860 年太平天国の首都・南京に入り「干王」に封じられた洪仁玕の動静を，おもに南京を訪問した外国人宣教師との交流を軸に考察する。筆者は宣教師たちの眼に映る洪仁玕像の変化をおいながら，西洋諸国の太平天国評価が肯定から否定へと推移してゆくさまを，各種報告書や新聞記事などをもとに丹念にたどっている。

本論最後の第7章「開港場知識人の台頭」では，キリスト教や西洋理解，さらに太平天国との関わりで，洪仁玕と共通する要素の多い王韜など複数の「開港場知識人」の思想や活動を取り上げ，改めて本論の主題である「開港場知識人」の存在様態について総括的な展望を提示する。

終章では，以上の各章で積み重ねてきた考察をもとに，大きく以下の三点の結論が導き出される。第一に，19 世紀 40 年代から 60 年代にかけて，プロテスタント宣教師とかれらに近接した中国人信者の関係は，前者が後者に一方的に知識や信仰を施したというものではなく，互いに相手の文化や学術を学ぼうとする一面もあったこと。第二に，洪仁玕という特異な経歴を有する人物は「開港場知識人」という，近代に誕生した新たなエリート群の中に位置づけられるが，この知識人群は，科学を含む西洋知識やキリスト教受容などの要素をもとに，さらにいくつかのグループに分節化しうること。そして，第三に太平天国――洪仁玕――キリスト教というつながりのなかでこそ，『資政新篇』に含まれる時代的意義と中国近代化への独自の志向を見出しうること，以上が最後に提示される本論文の結論である。

以上のような構成と内容をそなえる本論文に対して，審査委員はおもに以下の三点で高い評価を与えた。

まず，従来西洋人宣教師の活動のみに光をあててきた中国プロテスタント史の中で，さまざまな背景や人脈によって結ばれる中国人信者が布教や科学伝播などの面で果たした役割を正当に評価し，太平天国とキリスト教の関係を再考する上で新たな視点を提示したことである。

次に，未公刊の一次資料などを用いながら，洪仁玕の生涯と思想の全体像を見事に描ききったことである。とりわけ『資政新篇』のテキスト生成過程を丹念に跡づけ，その内容理解を深めたことは，本論文が国際的に誇ることのできる画期的な成果と言え，洪仁玕および太平天国史の研究に新生面を切り開いたことは疑いない。

第三に，洪仁玕という人物を基軸としながらも，「開港場知識人」という枠組みを設定して，それを一群の中国知識人の思想や活動に広げる展望を示し，この時期の中国近代史像の再構成に重要な視座を提供したことも，本論文の貢献の一つである。

さらに，本論で展開される丁寧な叙述のあり方や，日本語表現力の高さ，浩瀚な資料の調査と分析の能力に対しても，審査委員会は高く評価すべきとの意見で一致を見た。

ただ，本論文に若干の欠点や不足がないわけではない。審査委員からは，参考文献一覧の英文表記に不適切な箇所が多いとの指摘がなされた。また，「開港場知識人」という概念の曖昧さや定義のしかたについても，複数の審査員から疑問が呈された。さらに，文中多用される「西洋知識」の内実については，宗教的要素を含めたより細かな歴史的整理が必要だとの意見が出された。

とはいえ，以上述べたような短所は，本論文の学術的な価値を損なうものではない。

以上，総括するに，本論文の達成が中国地域研究，中国近現代史研究に大きな貢献をもたらしたことは疑いない。したがって，本審査委員会は一致して博士（学術）の学位を授与するのにふさわしい論文と認定する。